

八田さんの発表について

---

2005.2.12

鈴木健

## オープンソースをどう解釈するか

---

□ ぼくの見解: オープンソースは生産プロセスの革命

□ オープンソースの解釈

■ コミュニケーションメディアとしてのオープンソース

1. 内面(規範) ストールマン

組織

2. オープンソースライセンス(環境)

市場

3. 生産(開発)プロセス

□ オープンソースの自律性

■ コードの自律的な反応ネットワーク

■ たとえば貨幣のようなもの

## 1 . 規律(内面)について

---

### □ オープンソースの何が古いのか

- 科学者コミュニティの倫理
- MIT AIラボでのストールマンの経験
- 「オープンソースソフトウェア 彼らはいかにしてビジネススタンダードになったか」Chris DiBona, Sam Ockman, Mark Stone 編著
- リーナスの発言(ZDNetから引用)
  - 「製品と知識は別物だ」とTorvalds氏。オープンソースは、情報と知識を自由に共有するという西洋科学が「ギリシャ時代から」踏襲してきた伝統の延長線として位置付けられるべきだと言う。
  - 「誰かと知識を共有するということは、その相手も自分に知識を分けてくれるということだ。そう考えれば、相手と知識を共有したからといって金銭的な損失を被ることはない。むしろ共有し合った方がプラスになる」とTorvalds氏。大学の研究成果を共有し合うのは、ほかの研究者に研究成果を開示することで、さらに高度な研究につなげるためだ。オープンソースコードは、多くの開発者の競争やテストを勝ち残ってきたコードであり、公共の知識に大きく貢献するはずだ、と同氏は言う。
  - 「私は自分を科学者だと考えている。だから金持ちにはなれないだろう。実際、Linuxが金儲けの手段になることはないと思う」とTorvalds氏

### □ 論点1:オープンソースが科学者コミュニティ的パラダイムであること 自体の限界は何か？

---

## 2 . 環境(ライセンス)について

---

- フォークの進化生物学的解釈
  - 変更する前のライセンスとソースで開発を続行可能
  - コードの自律性を明示化 = > 生物的多様性と発展
- 科学者コミュニティにおけるミームを現実化した
  - DNA = コード
  - たんぱく = プログラム、コンパイラ
- オープンソースとそのOSDの進化生物学的解釈
  - オープンソース: 自律的な(コード)化学反応ネットワーク
  - オープンソースの定義(OSD): (コード)化学反応ネットワークの力学系の性質を定義:  
進化の進化
- 進化生物学のゲーム論
  - コードをオープンにすること
  - コードをクローズドにすること
    - コードの持続性が問題であって、たとえば性によって交叉が可能になるが逆にいえば種内部でのコードの困いこみが発生している。
- 論点2: 進化生物学(進化ゲーム論)とのメタファーがどこまで可能か。もし成立するのであれば、生態系を設計するというような話が成立するのか。

### 3 . 生産プロセス

---

- オープンソースの何が新しいのか
  - オープンソースは生産プロセスの革命
- 「ソースのソース」(ソースを生み出す元) = 「生産プロセス」の可視化
  - キーワードは「ビジビリティ(Visibility)」。人は見られていると、キレイでいようとする。例えば、在庫がいつでも誰からでも見えるようになれば、現場に緊張感が生まれて在庫がだぶつかなくなる。だからITでビジネスを可視化するんです。(江島さんのblogから引用:K社の人の発言)
  
- 生産プロセスの可視化はどこまで有効か
  - ソフトウェアは無駄が認められる(コピーコスト)。
  - 取引コストの経済学(組織のサイズや最適化)
  - アジャイル開発プロセス(組織内プロジェクト)
  
- 論点3:生産プロセスプロセスの可視化ということを一般社会に敷衍化したときに、組織の生成消滅変化と情報の越境性はどういう関係にあるのか? 世界は滑らかになるのか?(コミュニティによる蛸壺ではなく)